

松永安左工門

私は松永翁がすでに晩年を迎えられてからその知遇を得たものであるが、私は、そのことを誇りにも思いかつ感謝もしている。終戦後間もなく毎月第三火曜日に、松永翁と故池田首相をかこむ「火曜会」という会合がもたれ、私もその仲間入りが許された。その会は池田さんや松永翁が逝去された今日でも連続と続いている。電力界の木川田一隆、芦原義重、井上五郎、横山通夫の各氏をはじめ、小林中、永野重雄、桜田武、今里広記の四人組、それに奥村綱雄、小泉幸久、太田利三郎、堀江薫雄の各氏が加わり、政界からは賀屋興宣、前尾繁三郎の両先輩が参加されている。故人になられた曹礼之助翁も、生前出席されていた。

この会合を翁はたいへん楽しみにされていたと見えて、定刻の一時間も前に来られて、常に中央にどつかと座を占められていた。そして補聴器を前に据えられ、楽しそうにみんなの話に聴き入っておられたものである。初めのうちは、翁はいつも話の中心であり、時には語気鋭く議論の

相手もされたが、ここ数年来、耳が遠くなられてからは、柔和な面持ちで専ら聞き役に回られ、若干早目に引き揚げて行かれるのが常であった。

夏になると、この会は箱根仙石原の新日鉄の寮で開かれた。それがもう二十年以上も続いたことであるか。翁は生前一度も欠席されることがなかった。名古屋から「川文」の、東京からは「栄家」のそれぞれの女将がいつも加わって、翁の話相手になってくれた。集まる人々に対する翁の親愛の情は、時にきびしい叱正となつて爆発したこともあるが、まことにこまやかなものがあった。

思えば松永翁は、文字通り自由人であった。浩々たる自由の魂の権化ともいうべき人であった。自由に闊達に人生を生き抜き、怯懦と卑屈を極度にきらわれた。進んで言うべきことを言い、為すべきことを為し、その結果をおそれない人であった。克く英雄の心を擲るに足る勇氣ある人であった。豚のように肥って、平々凡々に生きることに耐えられない人であった。

松永翁はそれでいて、涼しい謙虚な心の持主であられた。接する人に対する友誼と親切は行き届いていた。また翁は繊細な雅致を解する人であった。花鳥風月に対する態度は敬虔でさえあった。絵を愛し、字を好み、茶を煎じ、花を愛でて脱俗の世界に遊ぶ綽々たる余裕をもたれた風流人であった。

晩年、翁はアーノルド・トインビー全集の刊行に異常な情熱を傾けられ、巨額の私財も投ぜられた。われわれの作った文明の明暗に、感受性の強い翁の心は深刻に揺れ動いていたにちがいない。文明の過去を探り、諸民族の興亡盛衰の跡を尋ねて現代を理解し、できればその未来を展望したかったにちがいない。巨匠トインビーに心酔されたことは、その史眼の中に日本民族の行方と、自らの生き方を模索してみようとする意図がこめられていたにちがいない。翁はかくして歴史に教訓を求められたが、翁自身の行蔵が、日本の歴史の骨格を形成する貴い素材になったのである。

休息を知らなかった翁の九十六年に及ぶ生涯は、人並み以上に永く、秀れて個性的で、しかも多彩であった。その節々には、翁の真実が赤い鮮血のように流れていた一生であった。私はいま、つくづく翁に知遇を得たことを光栄と思ひ、翁の偉大な人格に対する欣慕の念をあつくしている。